天眼鏡

コロナと家畜伝染病

新型コロナ感染症が止まらない。昨年１月に国内で初の感染を確認、２月に国内初の感染死亡者が発生。４月に緊急事態宣言が出されて５月下旬に解除されたが、着実に感染は広がり、再度、本年１月７日に緊急事態宣言が行われ、さらに期限が３月７日まで延長されたところだ。一方でワクチン接種のスケジュールも具体化されつつあるものの、変異種が発生・確認されるなど、終息が見通せるどころか、こうした事態がしばらくは恒常化しそうな気配である。

コロナ騒ぎの影響で扱いは小さいが、この２月２日には茨城県で高原性鳥インフルエンザの疑似患畜が確認された。今シーズンに入って 41 例目となる。また豚熱（CSF）についても 2018 年９月に岐阜県で発生して以降全国に広がり、この１月末時点で 11 県に及んでいる。このように家畜の世界でも感染症が猛威を振るっており、日本では概ね抑制可能になったものと楽観的に受け止められていた感染症対策が喫緊の最重要課題として再登場している。

以下、こうした状況下での、独り言である。鳥インフルエンザや豚熱等が発生するたびに報道されるのが鳥や豚の大量の殺処分で、痛ましいこと限りない。畜産農家の心中も察するに余りある。コロナと鳥インフルエンザ等を同列に扱うことはできないが、コロナの発生にともない人間世界では三密対策とフレイル対策の徹底が叫ばれている。三密は密集・密閉・密接を指すことはご承知のとおりで、とにもかくにもソーシャルディスタンスをとれ、ということで、厚労省は他人との距離を２メートルとることを推奨している。またフレイル対策はコロナにともなう不要不急の外出を控えることにともなう身体的機能と認知機能の低下を防ぐためのもので、適切な食事と運動、そして社会参加が欠かせないとされる。

このように感染症対策は、密を避けることによって感染から逃れるのが原則であり、あわせて感染にかかりにくい体づくり、すなわち免疫力を強化していくことが求められる。これはコロナに限らず感染症全般について妥当するものであり、さらには人間だけでなく家畜にも共通することであろう。ところが家畜については密飼いがほとんどで、感染症が発生すれば三密対策ではなく殺処分、そしてフレイル対策＝免疫力強化に代わって抗生物質の投与と消毒の徹底が行われる。とりあえずの対処は可能とはなっても、根本的な解決にはつながらないのではないかと考えざるを得ない。

家畜を人間と同列に扱って論じるのは極論にすぎるかもしれないが、ここで言いたいのは経済効率を優先した近代的・工場制的畜産が感染症を防いでいくには一定の限界があるのではないかということである。基本的なレベルでの見直しも一定程度講じていくことを抜きにしては畜産経営そのものの成立が困難になるのではないかと危惧されてならない。

あわせて思い出されるのが、「森林破壊の報い」である。すなわち森の中にいたコウモリ等が、森が破壊されて農地化や都市化されることによって森から追い出され、コウモリ等をつうじてコロナが人間に感染したとする見方である。森林の減少による生態系の変化が感染症の発生にも関係してくるという話だ。

近代的畜産は食料供給や食生活の豊かさに大きく貢献してきたことは間違いない。しかしながら感染症の抑制が困難な状況の中では、飼育方法や飼育環境にも一定程度の配慮・見直しなくしては持続的畜産経営が難しいことが明らかになりつつある。人間の世界では with コロナ時代の働き方・暮らし方の見直しがすすむが、畜産の世界もあらたなステージに差し掛かってきているように思わざるを得ない。これが単なる妄想にすぎなければいいのだが・・・。

（農的社会デザイン研究所　蔦谷　栄一）